

と 頭は梳かすのではなく考えるためにある

清水 聡 しみず さとる
商学部 教授

研究分野…消費者行動論。学生数…4年19名、3年20名、男女比はほぼ半々。
マーケティング戦略を、その対象である消費者の行動から説明しようとしています。

小学校以来、与えられた課題を決まったやり方で早く正確にこなせばOK、という成功体験をずっと積んできた学生たちは「自分たちで問題点を見つけ、考えて解く」というゼミでの勉強スタイルに、当初は非常に戸惑うようだ。それはまるで、カーナビに目的地を入力し、何も考えずにその通りに事故を起こさず今まで運転してきた優良ドライバーに、地図を渡して「さあ目的地に行つてごらん」と言っているのと同じで、なるほど、それなら運転できないなあと思ってしまう。タイトルの言葉は、そんな彼らによく言う言葉だ。

「やつている感」に変化し、彼らのモノを考える力やソリューション能力が飛躍的に伸びていくのが実感できる。ゼミの説明会で、「忙しいけれどエグくはないゼミ」と彼らが堂々と説明してくれる原因は、どうもそこにありそうだ。

ただ、そんな彼らも課題を何回かこなしていくと、自然に自分たちで問題を見つけ、考え、解決する方法を探し出してくるから流石だ。回を重ねるごとにアウトプットの質が上がるだけではなく、他のグループとの競争を意識したプレゼンになってくるのも面白い。問題解決方法が見つかり、ライバルに負けたくない気持ちが出てくると、ゼミでの活動が「やらされている感」か

以上のように私のゼミではグループワーク中心でワイワイガヤガヤと活動しているが、活動の過程で、私が全く知らない面白い文献や、分析に役に立つフリーソフトを探してくるなど、驚かされることも多い。彼らの手前、「あ、よく探してきたね」などと言って平静を装ってはいるが、「こいつらなかなかやるじゃないか」と思うこともしばしばで、まさに「半学半教」を実感させられる。ちょっと悔しいけれど、ちょっとうれしい瞬間である。

毎年、12月初めに開催される他大学との討論会に向けての研究が、ゼミ活動の大きなイベントになる。活動を通して、一生つきあえる関係を築いてほしいと願っている。



「買い物行動のメカニズム」を解明する

あんなかけん た
安仲健太君 商学部3年

「消費者はどのようにモノを選択し、購買するのか」。普段何気なく行う買い物ですが、その裏で私たちはどんなことを考えているのでしょうか。清水聡研究会はこのメカニズムを解明すべく、マーケティング分野の中でも特に消費者行動論について学んでいます。研究活動はなかなか一筋縄ではいきませんが、その分マーケティングの知見はもちろんのこと、論理的思考力や説明力など、実社会でも役立つであろう力が身につけてきている実感があります。また、企業のマーケティング関係職の方が講演してくださる機会もあり、実務での活用例を間近に感じることもできます。そして何より、ゼミ員と共に楽しみながらお互い支えつつ研究していける、そんな素晴らしい環境がこの研究会には整っています。

「糖類」……甘くなくても魅力的な分子

糖鎖生命工学という旗印の下で「研究には厳しく、研究生生活は楽しく」を合言葉に、教職員3名、学部生6名、修士課程10名、博士課程3名で研究に励んでいます。

佐藤智典さとうとしのり

理工学部生命情報学科 教授

私たちが研究対象にしているのは「糖」です。糖の勉強をするために教科書を開いてみると立体異性体や構造異性体に戸惑う人が多いのですが、その構造を明らかにしたのは、1902年にノーベル賞を受賞したエミール・フィッシャーです。生体内ではオリゴ糖、糖脂質、糖タンパク質、多糖など

多様な形で存在していることで、「糖」は難しいと感じられる方も多いでしょう。生体に存在している糖のほとんどに甘味はなく、一般にはなじみのない糖が複数つながった「糖鎖」として存在しています。糖鎖の研究を始めた頃には、その複雑さに「糖鎖って何者？」という印象でしたが、最近では「糖鎖だから何か役割があるに違いない！」という確信に変わってきました。

われわれの研究室では、バイオ医薬品を細胞に効率よく送り届けるために天然由来の多糖を使ったナノ粒子を開発しています。また、がん細胞やiPS細胞の目印となる糖鎖、ウイルス感染やアルツハイマーなどに関わる

糖鎖の解析を通して、生命のしくみを明らかにするための研究、細胞標的分子や感染阻害剤の開発を行っています。研究者を志した時に糖鎖の研究に足を踏み入れて以降、最も魅力を感じられる研究分野になってきました。

糖鎖の役割を解明するための基盤技術の発展に伴い、がん、感染症、再生医療などの分野での研究が加速され、診断や創薬への期待も膨らんできています。糖鎖の研究に関わる学問分野は化学だけでなく医薬との融合領域でもあり、実験対象は遺伝子やタンパク質などを含めた多様な生体分子に亘っています。糖が魅力的な分子であっても研究は決して甘くはありません。多くの失敗と試行錯誤の連続ですが、失敗した時の議論は理解を深めるチャンスであり、懸命に頑張る学生と優れた共同研究者の助言によりいくつもの壁を越えてきました。でも、ひとつの壁を越えると、その先にはさらに難しくさらに面白そうな課題が見えるようになります。「愈究而愈遠」を実感しています。

糖で解き明かす生命の謎

まつばやしけいいち

松林慶一君 理工学部生命情報学科4年

佐藤研究室では、遺伝子・タンパク質に次ぐ「第三の生命鎖」と言われる糖鎖の研究を行っています。日夜、実験に励み、毎週行われる「検討会」で自分の研究成果について全員でディスカッションを行います。時には厳しい指摘も受けますが、別の角度から結果を見直すことの大切さに気付かされます。研究は糖のように甘い道のりばかりではありませんが、苦労をして成果が出たときの喜びはひとしおです。

研究に一生懸命取り組む一方で、研究室の懇親会での息抜きは楽しみのひとつです。先輩・後輩の仲が良いので、皆でソフトボールやお好み焼きパーティーをするなど、学年を超えた交流により楽しく充実した研究室生活を送っています。



「ソーシャルマーケティング」で社会の課題を解決する力を

■ 玉村雅敏

総合政策学部 准教授

「ソーシャルマーケティングと価値共創」をテーマに、塾生・SA・TA・教員30名とOBOG50名が学びあい、教えあひながら、社会を先導する智徳を身につける研究会。

マーケティングとは「Market + ing（「市場づくり」）であり、「市場（Ⅱ）さまざまなやりとりや関係づくりを通じて価値が共創され、関係者に満足が提供される場」を創り、「持続的に機能させること（Ⅲ＝現在進行形）」を意味する。そして、現在のマーケティングは、営利企業での活動のみならず、公共・非営利の領域や、地域づくり、社会キャンペーンなどでも、その使命や目的をより効果的・効率的に実現するために活用されている。また、営利企業でも、企業の持続性を支えるために、CSR（企業の社会的責任）や社会貢献活動など、企業活動の社会的成果も重視する時代となったが、その成果も高めるためにもマーケティングの発想や技術が活用されている。これらは「ソーシャルマーケティング」と呼ばれている。

福澤諭吉先生はSocietyを「人間交際」の概念で捉え、社会とは人間で行われるさまざまな交際を通じて形成されていくとした。この観点に立つと、ソーシャルマーケティングとは「人間

交際の市場づくり」。より効果的に人間交際を機能させ、社会の課題解決や豊かさを実現させることである。

玉村研究会では、このソーシャルマーケティングの本質を探求し、数多くの文献を読み、理論や概念を学び・教えあうことを行いながら、学生自身の研究プロジェクトや、企業との協働プロジェクト、宮古島・富士吉田・長崎などの全国各地での実践プロジェクトを行っている。教員が掲げたテーマの下に発足した研究会であるが、塾生自身が、慶應義塾の精神（半学半教、独立自尊、気品の泉源、智徳の模範など）も意識して、さまざまなルールや進め方を徐々に創り出してきた。一人一人が実学を通じて「学問（智）」を追求するとともに、研究会の場のあるべき姿を考え、そこでの営みを通じて、「徳（心や行動の習慣）」を身につけることを目指している。「ソーシャルマーケティング」を学ぶ塾生だからこそ、研究会でも、よりよい「人間交際の市場づくり」を追求しているのである。



SA (Student Assistant) 学部生の授業支援スタッフ、TA (Teaching Assistant) 大学院生の授業支援スタッフ

「ソーシャル」がつなぐ学びの場

山脇一恵君 環境情報学部4年

コーズマーケティング、経験価値、CSR……。SFCらしい用語が飛び交う研究会。ソーシャルマーケティングに関する学びを日々深めています。個人の研究分野は食と農、街づくり、デザイン思考と多種多様で、その成果は全員が年度末に論文にし、冊子として発行しています。また、毎週1冊の課題文献を個人で読み込み、チームで徹底的に議論と追加調査を行い、研究会に臨み、他のチームに教えあいます。体系的な学びだけではなく、現場でのフィールドワークも重視し、春学期はチーム研究の成果を雑誌やカタログ等として発信する実践的活動も行います。Facebookページを通じてお互いにフィードバックを行い、OBOGからも助言や社会の旬な情報をいただく、つながりが強い研究会です。

慢性看護学を探究する苗床として

新藤プロジェクト・IIでは、毎年4年生4〜5名の学生たちが病と共に生きる人の多様性の理解とそれを支援する看護を探究しています。

新藤悦子

看護医療学部 准教授

私は、がんを患い長期に療養する人の生活上の課題と支援のあり方、またそれを支える看護師の実践知やケア力向上について研究しています。

世界保健機関によると、世界中の死因の60%が慢性疾患であるという事実から、慢性疾患はいまや世界的かつ重要な健康課題となっています。

慢性・長期的な疾病や障害は、がん、心臓病、慢性呼吸器疾患、脳血管障害、糖尿病、慢性疼痛など多岐にわたり、各疾病の特徴や治療の特徴によってその様相は異なります。また長期であることはさまざまな健康状態のゆらぎに付き合っていくことであり、生活に大きな影響を及ぼします。そこには病と共に生きる人それぞれの生き方、療養の仕方があります。

ケアの主体者である病を持つ人および家族の経験に寄り添い、共に考えていくことが重要となります。治療や生活の仕方についての意思決定を支え、心身の苦痛を緩和する手立てを共に考え、生活の中に潜む悪化因子を回避す

る術と共に考えていく——慢性的な健康状態のゆらぎの中で、生活と療養のバランスを保ちながら最適な健康状態を生み出していくことができるように支援したいと考えています。

このプロジェクトに集まる学生たちは、実習などで出会った方々からいただいた有形無形のメッセージを敏感に感じ、理解をさらに深めて「病を持つつつ生活と療養のバランスを保つていくために、看護の面からできることは何か」を追求しようとしています。それぞれの問題意識に基づいてテーマを設定し、病院でのプロジェクト実習、患者会への参加、文献や闘病記などを通してリアリティをもつて当事者の理解を深めるなど、看護師の役割を模索しています。講義、実習、国家試験の準備、サークル活動に果敢に取り組みつつ、さらにプロジェクトで慢性看護について探究したいという熱い思いに接するとき、私自身も大きな刺激を受け、また心から学生たちの未来に大きな希望を感じています。

「病と共に生きるとは」を学ぶ

さいとうりえ
齋藤理恵君 看護医療学部4年

私たち新藤プロジェクトでは、実習での経験などで感じたことから、「病と共に生きるとは、その支援とは、また看護学生として慢性期看護学に貢献できることは何か」ということに日々向き合いつつ、新藤先生の温かいご指導の下、主体的な学びを行っています。

私は、日常的に食事制限をする必要のある炎症性腸疾患を抱えて生活する人に関する研究を行っています。実習や日常生活における関心を、研究テーマとして明らかにしていく過程は想像していたよりも骨の折れる作業ではありませんが、新藤プロジェクトで考えたことや学んだことは将来自分が看護師として臨床に立った時の礎となると感じています。

